アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品： 竜とそばかすの姫 その6

本日のテーマ：すずが Adolescent Process に向き合うということ

前回のおさらい

幼少期に水難事故で母を亡くした主人公のすずは、イキイキと遊び、情緒的に深く交流している場、つまり潜在空間を失ってしまった。そのために自分に自信が持てず、外的世界、つまり高校生活をイキイキと送ることができずに、『月の裏側（ヒロちゃん評）』のように外界の世界から距離を置いた高校生活送っていた。

けれども、ヒロちゃんの招待で入った SNS『U』の中ですずはベルという As（アバター）になり、その空間の中でイキイキと歌える様になり、たちまち『U』の中で歌姫として注目を集める様になっていく。この一連の流れは幼少期に途中、失ってしまった潜在空間を取り戻したとも考えられる。

その中で思春期の情緒的発達に伴う課題に向き合うことになる。それがエディプス葛藤である。そのエディプス葛藤が鮮やかに描かれたシーンが、密かに思いを寄せていた、幼馴染のしのぶ君から学校で声をかけられたシーンである。

そのシーンですずは、しのぶ君から学校で声をかけられたが、途中、周囲の視線が気になり、踵を返し、振り返った時には、しのぶ君とルカちゃんが談笑しており、そこに入れたい気持ちになっていた。

そこにはすずがその関係の中に入っていきたい憧れの思いと同時に叶わないという葛藤を感じており、今後のすずの課題としてその葛藤（エディプス葛藤）に向き合うことが必要不可欠。

そして『U』の世界でその空間を荒らすモンスター型の As 竜がでてくる。ベルはその存在に恐れながらも、強い関心を抱く。その竜の存在こそ、すず自身がこれまで距離を置き、分割して、否認してきた自身の情緒（怒り 恐れ 悲しみ etc）である。

竜を知る中で竜の優しい一面もみえ、竜を愛おしく感じ、ベルは竜の存在を受け入れ、自分が作った歌を竜の前で披露する。

この歌は竜に向けた歌なのだが、一方で自分自身の中で湧き起こる情緒にどうしたらいいのか解らない、その感情を素直に綴った歌のようにも感じられる。

これはベルが竜を受け止めた様に、『U』の中で自身の湧き起こる、これまで否認してきた自身の情緒（怒り 恐れ 悲しみ etc）に苦悩する歌の様に感じられる。つまりそれは、すずはその今まで否認してきた情緒を受け入れつつあるように感じられる。

それは現実世界ではルカちゃんやしのぶ君といった憧れであるが、彼らには敵わないエディプス葛藤にまつわる情緒であり、そこに向き合おうとする（ルカちゃんや、しのぶ君と対等に関わりた

い) が、憧れや嫉妬に伴う様々な情緒が溢れ出て、すずは驚き、混乱し、素直に自分の思いを表出できない苦しさを歌っているようにも感じられる。

その後、現実世界では、エディプス葛藤の対象であるルカちゃんに関わる様になり、ルカちゃんの好きな人に関する対話をシーン（70分20秒）を前々回とりあげた。

ここでルカちゃんは完全無欠のヒロインではなく、彼女もすずと同様にコンプレックスを抱えた一人の女性であることを知る。そしてすずも自分の内面を語り、自信が殻を破って、憧れのルカちゃんと対等になり、彼女と深く情緒的に関われる様になっていくという大人への成熟の過程が描かれている様に感じられる。

けれどもこのシーンではすず自身が自立した大人になる過程で抱く、不安や恐れ、そして悲しい感情という避けられない感情が置き去りにされている様に感じられる。

そこでしのぶ君に偶然でくわし、すずは自分の思いを伝えようとしたら、しのぶ君に『U』の中のベルとすずが同一であるということを見抜かれてしまい、すずは非常に動揺してし、しのぶ君がいる場から立ち去り、泣き崩れてしまう。

すずは『U』の中で、潜在空間を取り戻し、歌姫になり、竜というある意味自身の否認していき
た情緒を受け入れ、成熟してきた。しかし依然として『U』という潜在空間を脱して現実世界に主
体的に関わることに、すずは、怯えているように感じられる。そこをしのぶ君に直面化され、すず
は混乱し、取り乱したものと考えられる。

一方でそのしのぶ君の直面化がすずの心を突き動かしていくきっかけとなる。

→そこでヒロちゃんから竜の城がジャスティン達によって焼き払われ、『U』の中で竜が大変なこ
とになっているという知らせを受ける。

現実のAsとして竜を、ヒロちゃんとネット上で、探し求める中で、配信中の動画で恵が竜であ
ることを知るが、一方でその弟、知とともに父に虐待されていることを知る。どうにかコンタクト
を取ろうとするが、すずのままの姿ではベルであることを信じてもらえず、彼らに強い疑念をもた
れ、怒りをぶつけられてしまう。「助ける、助ける、助ける。もうウンザリなんだよ！！」

どうするべきかヒロちゃんたちは考えあぐねていた時にしのぶ君からすずの姿で歌う様強い促し
を受ける。そのことですずは苦悩する。

考え抜いたすずは、『U』の中、ベルの姿でいた。すずは『U』の中でアンベイルされることを決
意し、ベルは突然ジャスティンの右腕を掴み、右腕のブレスレットについたレンズ体から緑色の光
を放出させ、自分にその光を浴びさせ、ベルのオリジン、すずの姿を『U』内で曝け出す。

そしてすずは『U』の中でやさしく、そっと歌い始める。

【考察】

『U』のなかで、現実のすずの姿をさらけ出すということは、『U』という潜在空間での殻を破り、すず自身が主体性を確立し、現実世界に向き合っていくことを意味する（このことをウィニコットは『脱錯覚』と呼んでいる）。それは思春期のすずにとって、これまで回避してきたエディプス葛藤に向き合うということの意味すること、つまり、自身の受け止めきれなかった、竜の様な『憎しみ、恐れ、怒り、悲しみ』という自身が抱く感情を受け入れ、自身もそして相手もそういう感情を持ちながら悩んでいるということを受け止めていくことである。ここでヒロちゃんとしのぶ君のやりとりが興味深い。

この二人のやりとりは、ヒロちゃんはある意味「まだ、すずがエディプス葛藤に対峙するのは無理で、素顔のまま歌うということは『U』の世界に居続けることはできず、母の死の時と同じ様に潜在空間の剥奪につながり、元に戻ってしまう」と危惧し、ある種まだ子供の自立を受け入れられない母の姿であり、しのぶ君は「すずはもう十分に大人になったのだから、潜在空間はいらない。エディプス葛藤に向き合う力はある。」と社会に出ていくことを促す父親の姿の様にも感じられる。

先日、児玉さんが「それぞれの立場が浮き彫りになっている。内面の葛藤がそれぞれのキャラクターの口からでている」といっていたが、その様にこのシーンははず自身の内面が投影され、表現されている様に感じられる。つまり、ヒロちゃんなり、しのぶ君の言葉はず自身が依存と自立の間で揺れ動き、心の中での二人の登場人物（このことを内的対象という）がぶつかり合っているかの様である。

つまりヒロちゃんやしのぶ君はず自身の内的対象の投影となっている

それはある意味、ずずにとってエディプス対象にかわっていったとも捉えられる。そしてそのことから、ずずが距離を置いていた父との交流が始まったようにも感じられる。

6) 『U』のなかで歌うということ

『U』の中でずずは歌い出す。

きらめきの花 夢の宝石

世界は美しい

臆病と不安 縛られるけれども

強く優しく なれたら

あの空は 戻らない

ひとりでは 生きられない

あいたい もう一度

胸の奥 ふるえてる

ここにいるよ とどいて

はなればなれの 君へ

目を閉じた 時だけ

会えるなんて 信じられない

あいたい

はなればなれの 君へ

【考察】

この歌詞は As としての竜に向けて歌った歌であるが、亡くなってしまった母の思慕の念を綴った歌詞のようにも感じられる。そしてすぐ自身が一人の女性と成熟し、母のように他者を受け入れようとする決意にも感じられる。

すずがこの歌を歌う中で、幼い頃に中洲に取り残された子が「助けて」と泣き叫び、周囲の大人達は誰も手出しできず、狼狽している中で、母は覚悟を決め、懇願するすずを振り切り、「だめだよ。行かなきゃあの子が死んじゃう。」と言って、ライフジャケットを着て、その子を助けたことを思い出し、すずはハッとする。

母を失ったことは非常に悲しい思いだったかもしれない。一方で自分も川に入って行こうとすることを引き止めたしのぶ君やこれまですずを陰ながら見守ってきた周囲への感謝、そして母の偉大さを感じ始めているように感じている。これはまさに抑うつポジションへの移行である。

これまですずは『母さんは、なぜ私を置いて川にはいったのか？なぜ私と生きるよりも、名前の知らないその子を助けることを選んだのか？なぜ私は一人ぼっちなのか？なぜ、なぜ、なぜ』と問いかけていたが、それはある意味、亡くなった母を悪い対象と捉えてきたように感じられる。松木邦裕は妄想分裂ポジションにあるときは良い対象が亡くなったのではなく、悪い対象に苦しめられているという体験をすずと言っている。まさにすずはこれまで、母の喪失を受け入れられず、妄想分裂ポジションのなかでのたうちまわっていたように感じられる。『U』の中で評価され、竜という存在を受け入れる中で、すずは徐々に周囲に愛されてきたことを理解し、すずの心が妄想分裂ポジションから抑うつポジションへと移行していった。その移行は愛と憎しみの葛藤であり、自身のもつ愛の中にいかに憎しみを収めるかということが大切になってくる。

小説版には次のように書かれている

私は、美女でもなんでもない。ただの田舎に住むそばかすだらけの少女でしかない。

だけど私の中には、ベルがいる。

もうひとりのわたしが、私を、強くしてくれたのだ。ベルは消えてしまったが、私の芯として、
いまでも私の中にあり続ける。

ありがとう。

まさにこの心の変化こそが、潜在空間で思い通りに歌える中で、すずは、自身の主体性を確立した瞬間であり、妄想分裂ポジションから抑うつポジションへと移行し、一人の大人として成熟していく姿が描かれていると考える。

そしてそのことが次の展開である、恵くんに会いに行くということにつながってくる。

7) 恵くん会いに行くこと

『U』でベルをアンベイルし、すずのありのままの姿をみせ、『U』では竜の姿であった恵くんへ
すずがベルであることを認められ、再び二人はネットを通じてつながる。しかしその画面に恵くん
の父親が現れ、恵くんと知くんに暴力をふるう。その場所がどうにか判明するも、誰も彼らにで
きる術がなく、狼狽しているなかで、すずは駆け出し、恵くんのいる元へと向かっていく。

まさにこれは幼い頃に中洲に取り残された子をすずの母親が川に入れて行こうとするシーンと

重なる。

すずが抑うつポジションに移行し、一人の成熟した大人になるなかで、主体的になり、母と同じような行動をとったと考えられる。

そして夜行バスに飛び乗り恵君の元に駆けつける中で父と SNS でやりとりするシーンを取り上げる。

すず：父さん、何も言わなくて出かけてしまったけど、ちょっと遠くに行ってきます。

父：合唱の皆さんたちからメールがあった。

すず：いつも勝手な娘でごめんなさい

父：事情があるんだね

すず：大事な人が、困っている。

父：君は、その人の力になろうとしている。

すず：でも、私なんかが力になれるのか、わからなくて

父：君は、かあさんが突然いなくなって、寂しくて、ずっとそれを我慢してきた。とても辛かったと思うけど、でもこうして親切な子に育った。人の気持ちがわかる子に育った

父：すず。君は、かあさんに育てられて、こんなに優しい子になったんだよ。

父：その人に優しくしてあげなさい。

すず：ありがとう

【考察】

この SNS のやり取りで、すずは自身が、とにかく恵君に会いに行くということが自分の使命であると、主体的に自分の突き進むべき道をすでに固めている。一方で、自身の無鉄砲な振る舞いで父を心配させてしまったのではないかと危惧している。そしてその気持ちを父が受け止める中で、すず自身の葛藤を父にほんのわずかな言葉だが、キチンと吐露している。ここは今まで父を必要以上に怖がり、迫害的に感じていた（妄想分裂ポジション）のすずの心性が大きく変わり、ある種対等に父に自分の思いを語り、二人の距離がこれまでになく近くなっている。ある種のすずの成熟を表している。その後も父の言葉は非常にこれまでのすずの心に寄り添った言葉であり、胸打つ言葉である。その文面を読み、すずは涙をこぼしたが、それだけ父の言葉がずずくに響いたのだと考えられる。

ここで父という対象がすずにとって迫害的对象ではなく、自分に寄り添い、導いてくれる対象なのだということを理解した瞬間と考えられる。

すずは恵くんの住む街にいき、実際の彼らに出会い、抱きしめる。そして恵くんの父親が怒った様子で出て、恵くんをすずから引き裂こうとする。

そこに覚悟を決めて、すずは立ち上がり、父親に対峙する。父親は拳を構えて威嚇するが、みじろぎもしないすずの姿に動揺し、逃げ出すように戻っていく。

このシーンは色々賛否両論分かれるシーンであるが、すずが恵くんの父親に対峙するなかで、すずは主体性を持った大人の女性である一方で、恵くんの父は彼の子供達を仲良くやっているという姿は偽りの姿で、すずによって、ある意味アンベイルされ、「大人でも親でもないただの弱々しい哀れな男」であるということが露呈され、彼はそれが受け入れられず、逃げ出してしまったと感じられる。そのことに恵くんはハッとして

「僕も立ち向かわなきゃいけないって思った。だから闘うよ。」

と言った。そして知くんは

「ベル、キミは、キレイ」

このシーンはなにか「君の名は。」と町長である父と主人公の宮水三葉が対峙するシーンと非常に重なる。

8) 恵くんとの出会いの後、すずはどう変わったのか？

①恵くんとの出会いの後、帰り際、自宅近くの駅である伊野駅のホームに降りた時に父が迎えに来ている。

父「……今日、ごはんは？」

すず「……食べる」

父「じゃ、たたき、食おう」

【考察】

小説版ではこのやり取りの後に

たったこれだけのやりとりをするのに、一体、何ヶ月、何年の時間を費やしたのだろうか。でもいいんだ。やっと言えた。

と書かれている。

これはさすが自身が思春期の中でエディプス葛藤を経て、父という存在を受け入れたとシーンと考えられる。そして父が作ったご飯をこれまでは「いらない」といって拒んできたすが、それを「食べる」と言ったこと、つまり父を受け入れた象徴のようにも感じられる。

すずは恵君との関わりがあるまで、エディプス葛藤から距離を取るように父から避けてきたが、視聴者側から見ると父は非常に温厚に見えるが、もしかしたらすずの内的世界では、父を恵君の父のように非常に怖い対象（自分を脅かす悪い対象：つまり自身の悪い内的対象の投影でもある）と捉え、怯え、距離をとり、また、それがすず自身の強烈な超自我となり、彼女自身苛まれてきたのかもしれない。しかし恵君の父と対峙することで、すず自身の超自我は穏やかなものになり、現実世界を伸び伸びと受け入れられるようになったようにも考えられる。

②その後、皆と一緒に河原沿いを歩くシーンでしのぶ君に言われたシーン

「あの子たちを守るすずを見て、なかなかやるなと思った」

「かっこよかったぜ」

「ああ、やっと解放された。 もう守るんじゃないくて、これから普通に付き合える気がする。昔からそうしたかったんだ」

しのぶ君のこのセリフは上記の考察の通りにさすが、恵君との出会いを通じて自身のエディプス葛藤に向き合い、成熟し、しのぶ君と対等な立場で関われるようになった言っているように感じられる。

そしてそれが青春の群像を爽やかに瑞々しく描いた作品となっている。